六月でありますから気候も良くなり、第二〇収容所長は柴山さんでした。

あまり高い山ではありませんでした。シベリアの土地は砂地です。幅一・二メートル、深さ一〇メートルの穴を二人交代で一〇メートル掘る。深さ一〇メートルの所に三メートル角の横穴、これは火薬三トンを詰めるためのもの。それに電気爆破で長さ二キロメートル。この山を爆破すれば日本へ帰国と収容所本部より命令がありました。一致団結して爆破に成功しました。

昭和二十四年六月末、一八五キロ収容所から帰国の途につき、タイセット駅からナホトカ着。

八月二十八日、遠州丸にて二二一中隊一班、舞鶴引揚援護局に帰着。大分県日田市二串町の我が家へ帰省。

シベリア抑留追想記(二)

熊本県　本田正行

前回(『平和の礎Ⅷ』)の寄稿で記述不足の部分を、古い雑記帳の中から抜粋して投稿いたします。

強制抑留の労苦は、いずれも大同小異であることを『平和の礎』を拝読して感ずるのですが、地区的な見地から、その痛みが違うし、また受ける労苦も差異があることも事実です。

歴史の証言としての抑留労苦談も、後世の人々が真実を理解して、再びこのような残酷な事態に遭わぬよう、平和で幸せな社会創造の知恵として理解してもらうことに意義を感ずるものです。シベリア抑留の労苦は、少ない食糧でノルマを果たした強制労働に源を発しており、そのために死んでいった戦友の殉死を無駄にせぬようにすることが肝要であり、『平和の礎』発刊の重要性を痛感する次第です。栄養失調で死んで

いった戦友になすすべもなかった自分達が情けなく、またその無力さ、無念さを思い、あのとき一握りの食物があったらと思うと恨めしい。

二〇センチ径で二メートルの材木を、二十二歳の青年が二人がかりでやっと担いで雪の中を運んで行くとき、小さな小枝に足を取られて倒れる。材木と共に脇の雪の中に埋まってしまう。すぐには起き上がれない。しばらくして、いも虫のようにしてひざまづく。材木を取り出すまでには時間がかかる。嘘のような本当の話である。

ちょうどその頃だったと思う。雪のため食料が届かないから、二日分の食料を五日に食べ延ばしていた。高粱の「おかゆ」飯盒一杯分を二人で交互に、ふたによそってすすっていた。

とにかく、人間、塩分が不足すると栄養失調の始まりのような気がする。目だけギョロギョロして、あばら骨が出て、皮膚で覆っている感じ。足が重くて、とにかく前進が苦痛となる。ああ、このままここで死ぬかも知れぬ、と何回も思った。しかし、俺だけじゃない、他の戦友と助け合って、どうしても日本へ帰りたいという思いは旺盛だった。それでダモイできたと回想している。

私達の所では、パン粉に魚、野菜等煮込んだ雑炊だったので、我々初年兵は当番が多く、分配後の木製飯缶（バッカン）を洗う前に、底についているのり状の物を指で集めて口にして空腹をいやした気になっていた。その後、お湯を注いで洗って炊事場に返していた。この当番も楽しみになっていた。乞食以下とお笑いでしょうが、これも本当の話です。

衣食足りて礼節を知るというが、人間、生きる条件はまず食事です。裸の赤ん坊もお乳から始まります。とにかく「食べ物の恨みは絶対忘れない」は真実です。その意味で、今回は「食」について回想を歴史の証言として、沿海州の森林での餓鬼道の話をします。

雪の中では木の皮か針葉樹の葉しか目に映りません。後で聞いた話だが、他地区では、松の皮をはいであく抜きして食べたと聞きましたが、九州の我々には思いつかなかった。古本に、米沢藩で飢饉のとき、土

や松の皮を食べて生き残ったとあり、知っていればなーと今さら悔いても後の祭り。二十一年の雪解けまでは「忍耐」の二字しかなく、栄養失調の体を酷使して飯代を稼がざるを得ず、ビタミン不足で夜盲症が多くなり、夜間便に行くのに目を開いても見えず、手探りで行かざるを得ぬ。そのとき、松葉をぬるま湯に一日浸してそれを飲むと、少しずつ回復してきた。その上、半年も山の中で風呂もなく、シラミが蔓延して熟睡できない。ペーチカの上で沸かした飯盒の湯で体を拭いて一時の安らぎを感ずるのみ。昼は「ダワイダワイ」、夜は「カイカイポリポリ」、とにかく耐えるしかない。凍土では木の根も掘れない。

恵まれたと言えば、薪が豊富だったから暖をとるには良かった。しかし、長く休憩していると警戒兵がやって来て「ダワイ」と言って焚き火に雪をかぶせる。この野郎と思っても思うだけでどうにもならぬ。しぶしぶ、やおら立ち上がって作業する。焚き火が多いので飛び火してズボンは穴だらけ。修理するにも布がない。針は持っている人から借りても糸がない。破れたタオルの端をほどいて糸を作って繕う。そのうち生地自体がボロボロになる。裏返すと、裏は白か薄鼠色で汚れるのが早い。目はギョロギョロ、衣類はボロボロ、元気のない「いも虫」が歩いているようだった。母上に見せたら泣くだろう。幸い写真がないのが良し悪しだが？　「ダモイ」の一点が生きる力となっていたことは事実であった。

冬の伐採は体の動作が鈍いから危険であった。傾斜地では切り口の差に注意しないと危険だ。まだ切り終えぬ前に裂けて、五、六メートル根元が上に上がってその場に落ちる。そのため逃げ遅れて下敷きになって死んだ者がいた。それからは、まず逃げ場を確保してからかかるようになった。犠牲者が出て次への知恵が出てくる。これも死んだ戦友の遺言と理解している。作業終了後、兵舎内は狭いので急造の作業場を片づけて野辺の送りとなる。幸い坊さんがいたので、タイマツで灯りをぼろ切れに火をつけて線香代わり。翌日埋葬となり、四人くらいで穴掘り作業をするが、凍土の墓地で薪を焚く。しばらくしてその火を横に移して燃

やす。前の所を金棒でつついて掘る。一〇センチも掘ると堅くて掘れない。横の火を移し後の所を掘る。繰り返し掘っても一日で一メートルも掘ればよい方。死体を置き凍土を覆って別れをしても、ここらは狼がいて、下の部落の馬小屋を襲った話もあり、丸太を並べて掘り返されないようにしておき、雪解けになってから深く掘って埋葬し直していた。

墓地といえば、この際言っておきたいことがある。ゴルバチョフが日本政府に渡したという「死亡者名簿」、朝日新聞社発行の本に、我々の収容所分は見当たらない。我々はスーチャン地区、五六六個別労働大隊と名付けられていたが、五六五から飛んで五六七以後はある。隣接分に混合しているかと思い、さきの犠牲者名を探すが見当たらない。確かにソ連本部が死亡者名簿をコミッシャに渡すのを確認（二十三年夏ごろ）したことを覚えている。彼等が未報告のまま放置したとしか思えぬ。

チグロワヤ駐在（幸か不幸か、三年間、この地の谷間を渡り歩いての伐採作業で、病人以外は移動していない）の五六六大隊は幽霊部隊か？

遺骨収集ができても少人数は危険。警戒兵付きで少なくとも一〇人以上行かないと危険だと思う。なにせ「虎の村」ですから。朝鮮人参探しの地方人も猟銃を持っていました。

明けて二十一年の四月ごろ、南斜面から解け始まる。みんな小枝で土をつついている。ハコベの新芽掘りだ。私もやってみて、労力と収穫とは釣り合わぬけど、少しばかりでも空腹がいやされた気になる。生で食べても別段下痢もしなかった。

五月になると忙しくなり、楽しさがあって少し元気が出てきたようだった。薮では、ゼンマイ、ヨモギ（石でつぶして万頭に入れて大きくする）、ワラビ、山ゴボウ、木の芽ではタラの若芽。帰るときは各人は五〇センチ長さの薪を一個ずつ兵舎用に持ち帰っていたが、それに合わせて草の束も振り分け荷物で持ち帰る。当番が夕食の準備をしている間、広場では思い思いの飯盒炊事で賑わった。塩気がないけど腹さえ満たされればと、このころは労力価値も増えていて、本番

と混ぜて食べて空腹を満たしていた。

森にも新緑が鮮やかになり、白樺より出る汁は少し甘味がある。空の水筒を持って山に登り、明日伐採する木に斧でゴム汁を採集するような要領で流れ口を作り、その下に水筒を置く。最初はポッリポッリだが、木次第では継続して流れ落ちて来て、喉を潤してくれた。紅葉も出るが、変な甘さでズルチン（人工甘味料）のような味だった。野草の中には口がしびれる物もあり、その都度入り口の掲示板に表示された。

六月になって川も氷結から解放され、ヤマメのような魚がいるので、釣り好きの者はワイヤーの鋼鉄で自家製の釣り針を作り魚を釣っていた。料理の方も、食糧倉庫の使役に行った者が岩塩を頂戴して来て、それとなく出回って、外食を楽しむことができるようになった。仕事中に蛇が出て来ると見逃さず、時にはマムシもいて強壮剤として珍重された。川にある苔を海苔（ノリ）といって煮て食べた者もおり、タラの木肌をゆがいて食べたりした。中には、朝当番で湯沸かしていると野ネズミが来たので、持っている棒で火の中に叩き込んで焼いて食べたけど、後足のところにわずかな肉しかなく、焼けるときの何とも言えぬ臭さには往生したと話す者もいた。針ネズミが山にいて、それもつかまえて焼いて食べたが、これも脂肪ばかりで肉は少なかったと言っていた。そのほか、キツツキがいたときは、警戒兵をおだてて撃ち落としてもらったという者もいた。また、手負いのトナカイを一個分隊で囲んでつかまえたとか、二十二年には一個中隊でノロを包囲して取り押さえて分配したとか、食べることなら少々の苦労はいとわなかった。

私は二十二年から伐採検収の立会人になったが、デシャートニクがいつも猟銃を持って来て、検収が終わってから猟犬代わりにコジュケイ狩りに付き合わされて苦労した。二羽とったらお前にもやるからと言われ、皆も作業場にいて小言を言われるよりよいので、なるたけ遠くの方へ行くことにした。またそうでないと、作業場近くにはいなかった。ポケットに小石をいっぱい詰めて、彼の口笛でいる方向が決まれば迂回して反対側より石を投げて、彼の方へおびき寄せて撃

つが、いつも俺に向かって投げるなと言っていた。その年は二回、一羽ずつ仕留めたが、遂にこちらは「お預け」だった。「ご苦労」と言ってマホルカを一握りくれていたので、帰って戦友達に分けてやるのが楽しみだった。

二十三年夏、休日に山を越えて釣りに行って道に迷い、点呼に間に合わなかった二人を探しに行ったことがある。警戒兵二人、私達二人が行ったが、山越えのとき、私が先頭で行くとき、突然「本田、アパースノ」と後ろから言われ振り向くと、私に向かって自動小銃を連射した。びっくりして尋ねると、木の上からマムシがお前に飛びかかって来たのだと言う。マムシがバサッといって落ちてきた。するとその音で、付近の草むらからシュッシュッといって無数のマムシがそばにあった畳くらいの横石の下へ続々ともぐり込む。四人はその石に上って見守っていたが、一応収まったところで二人が石と石の間に銃口を入れ連射した。しばらくしてこの石をのけて見ることになり、我々は小さな斧を腰に差していたので、適当な棒を二本切って、二組でその石をのけた。幸い斜面になっていて石が滑り落ちたらびっくりした。銃弾でちぎれたマムシがうごめいている。頭だけ数えたが、大小六十数個あるのには驚いた。ここはマムシの巣だったのです。木の上に登って通る動物に襲いかかるんだと、警戒兵は説明した。それにしても、私の耳元をかすめてマムシを撃ち落とした彼には敬服した。山の頂上付近でジュウブラの足跡を見つけて追いかけたが、先方は早い。山を下りてみたら二人は先に帰っていてホッとした。皆にその話をしたところが、なぜシャツでも脱いで持って来なかったかと。恐ろしいのはマムシよりヤボンスキーだった。ウサギを捕まえたという話も聞いたし、下の方の川にはサケかマスか分からぬが、大きなのを捕らえて来たこともあった。産卵のため上って来るとロシア人は言っていた。

秋にはいろんな茸(キノコ)が立ち、腹を満たしてくれたが、中には毒茸を食べて痙攣(けいれん)を起こして死んだ者もいた。松の実は何よりの楽しみで、二十二年ごろは作業も慣れて、要領も分かってくると、中には分隊から松の実

取りが出発するところもあり、山奥の中腹から煙が上る。それを見て検収係長のヒゲ男がきつく私を叱る。松の実取りの煙だと言う。大きな木には百以上の実がついていて、それを焼いて中身だけを袋に入れて、担いで来て分配するのです。私は、「いや、あれは一般人が朝鮮人参を取りに行って焚き火をしているのだろう。日本人は銃を持たないからあんな山奥へは危険で行けない」と弁解していた。また、モミの赤く熟した実も甘くておいしかった。但し、これは禁止木で切ることを止められていた。薮の中には山ぶどうが豊富で、中には分隊で採ったのを発酵させていたが、飯盒は酸で駄目になるので、木製の箱で発酵させ成功した例もある。食うためには実によい知恵が出るものだと感心した。また、蔓になっていたものもある。山梨と言っていたが、スモモくらいの大きさだったが、少なかった。キルクの木と呼んでいたが、木肌は黄色で、干して腹薬として煎じて飲んでいた。朝鮮人参も五年物くらいを見つければ、ウラジオの病院で一万ルーブルで買ってくれる。彼等の月給が七百ルーブルと言っていたので、見つければ一年間遊んで暮らせると言っていた。共産党のもとでも、庶民はやっぱり庶民だと感じた。宝くじに当たるのと同じだと、今思えば、庶民の気持ちは一緒です。

恐いのはオオカミで、冬、ソ連兵舎のソリ用の馬屋に出没すると、自動小銃で追い払っていた。

下の部落近くに作業に行ったら、地方人が掘った後の畑を、木の枝で掘る。一列掘って二、三個の収穫でも、それを焼いて食べるときの満足感は格別だった。たまに十個くらいあったときには帰って飯盒で炊いて、皆とほうばったものです。今から思えば、情けないと言えば情けない話だけど、そのときは生きる条件として、食べることが最優先だったのです。寝ても覚めても食う話以外、話す楽しみはなかった。

演芸会等は二十二年後半からの話、それまでは如何にしてダモイできるような体力を維持できるかということが第一だった。雪解けとともに野草がまず助けてくれた。草を担いで帰るとソ連兵に「ヤポンスキー、ロージャジアジンナカオ」、馬と同じと笑われても、

ビタミンだと言って帰ったものだ。思えば、野草のお蔭で体力を維持できたし、今日あるも野草のお蔭。実際あのときは高級野菜に見えたし、食べられない草が本当の草だった。苦しみを助けてくれたので、あえて「苦佐」と呼んでいる。

シベリア抑留は苦しさに負けてばかりではない。生活の知恵として、人間、最低の暮らしになっても生きる力を教えてくれた。生活の知恵として自然環境の応用力を学んだし、忍耐の限度受入れの自己採点力を身につけることができたことに、神仏の試練と感謝している。

【執筆者の紹介】

現住所　八代市松崎町

出生地　熊本県八代郡吉野村（現竜北町）

昭和十二年三月三十一日　吉野尋常高等小学校卒業

昭和十七年九月五日　戦時徴用令により佐世保海軍軍事部に勤務

昭和二十年二月十五日　満州第七〇〇〇部隊入隊

九月十二日　拉古編成第一二九隊として入ソのため徒歩出発

二十一日　綏芬河通過、グロデコーに到着

二十七日　沿海州チグロワヤにて森林伐採に従事

昭和二十三年九月三十日　ナホトカ港出港

十月六日　本籍地帰還　以来商店勤め

昭和五十一年一月十五日　全抑協熊本県連合会八代支部事務局長、現在支部長

信条として、シベリア抑留者慰霊のため、抑留体験者と遺族が結束し、協賛者の参加を求めて活躍中。

（熊本県　南部　吉正）